中山隆之さん　戦争体験

聞き手　　滝沢七五三掛　村端浩

2015 年 8 月 29 日

昨日は午後から、中山隆之さんから戦争体験を聞くためにお宅を訪問しました。中山さんは、バラ園の土地の提供者であり、私に畑を貸して下さっている方でもあります。

かねてから話を聞きたいと思っていたのですが、なかなかチャンスがつかめず、延び延びになっていたところ、今日の午後から時間を取ってもらうことができたのです。

レコーダー、カメラを持ってお宅に伺うと、なかなか元気がよさそうで安心しました。前にもちょっと書いたように、何人かの前で話を聞かせてほしいと頼んでも、外に出掛けるのは困るということで、結局私との対談形式での聞き取りということになりました。

中山さんは現在 92 才。頭脳は明晰、世話好きで包容力のあるなかなか魅力的な人物です。

私よりちょっと下だがほとんど同年代という息子さんご夫妻と同居していて、ずっと家にいるとかえって足腰が衰えるからと、都合の悪い足をかばいながらときどき畑にでて大きな耕耘機すら運転するほど元気なお方です。

本当はもう少し予備知識を持って臨むべきだったのですが、タイミングを失うと永遠に話を聴けなくなってしまうのではと思われ、思い切って時間を取ることにしたのです。

応接室に通されて、一旦話始めると、またまた話が止まらなくなる。息子さんに聞いても自宅ではこのような話はあまりしないということ。かつては子ども達に話して聞かせたこともあると聞きましたが、まとまって話をするのは今回が初めてなのではないでしょうか。

話の中身は、満蒙開拓青少年義勇軍として「満州」（中国東北部　以下カッコ抜きで満州と記します）に渡ってから帰国するまでの体験です。数奇な体験記からきっといろいろな教訓が引き出せるのではないかと思われました。

当時満州に渡った当時の人たちの数は長野県が全国一。中山さんが満州に渡ったのは 1938 年（昭和 13 年）です。

ここで少し満蒙開拓団に関する歴史をおさらいしておきます。

中山さんが満州に渡るころの日本はどんな状態だったのか。中山さんが満州に渡る 2 年前の 1936 年に 2.26 事件が起こり、「満州移民のトーチカ」（満州移民に抵抗していた）といわれる高橋是清蔵相が殺害されます。これによって、「重しがとれた」ように軍の威をかりた移民推進派の力が増大し、国策としての満州移民へと変貌を遂げていきます。

関東軍は、36 年 5 月に 20 年間で 100 万戸 500 万人が入植する計画を策定します。その中

で、過去の武装移民に対する現地の批判を避けるために現地中国人への一定の配慮（未利用地優先、既耕地への金銭補償・代替地など）をとりつつ、「平和裏」に入植できる条件を整えようとします。

ところが、37 年に現在の北京郊外の盧溝橋付近で演習中の日本軍部隊と近くにいた中国軍との間で小競り合いが起こり、これをきっかけに日本軍は中国全土に事件を拡大、日中間の全面戦争へと発展していきます。

戦争は、農村の青年層を出征要員とし、産業界でも労働力を必要とするので満州移民は大きなマイナス要因となります。そこで考え出された秘策が「満蒙開拓青少年義勇軍」と「分村移民」でした。

1938 年 1 月には「募集要項」が作成され、全国一斉に募集がはじまります。応募資格は 16 才から 19 才まで。尋常小学校卒業者であれば資格は問わないというもの。初回は定員 5000 名に対して 2 倍近い応募があったと言います。

あとの話の中で出てくる内原訓練所は 38 年 1 月に開設され、所長は加藤完治、義勇軍の目標は「日満一体」と「五族協和」でした。義勇軍とはその名の通り少年兵の軍隊であり、広大な畑を耕し大地に生きるなどといううたい文句とは全く正反対でした。

では、実際に中山さんのお話に耳を傾けてみることにしましょう。インタビューしているので実際は対話形式なのですが、かえってわかりにくくなることもあるので、1 つのストーリーとしてつながるようにしました。

今回は概論というつもりで全体を通して聞き取りをした関係上、話は相当に長いので、何回かに分けて紹介せざるを得ません。語りはレコーダーで収録し多少編集して話をまとめたことをご了解ください。

１．生い立ち

生まれは大正 12 年 8 月 24 日。会染村(現池田町)のこの自宅ですがね、兄と姉、ふたりの弟、それに妹の 6 人兄弟でした。

私は戦争で兄と弟の二人を亡くしている。兄はボルネオで戦死、弟は満州に少年義勇軍で渡ったあと戦後の混乱の中で死んだようだが、その状況はよくつかめない。探したんですがね、結局わからなかった。姉はすでに亡くなり、妹は明科に嫁に行き、もう一人の弟はすぐ近くに住んでいる。

私は昭和 13 年に小学校を卒業して、当時なもんで、卒業はしても仕事はせいぜい小僧ぐらい。女は女工ぐらいで、これといった仕事もなくてね。そのときにちょうど満蒙開拓義勇軍の制度ができて、学校の先生に勧められたりした。またうちの親父も 5 反百姓で働けど暮らせ

ずという状況で苦労しているので、男だったら満州のような広いところでやれと、親父はそう言っただがね。
　お袋と姉は、そんなところに行かなんでも食っていくぐらいならどこにいてもいいと、そう言って反対したんだが。　主に学校の受け持ちの先生が、兄弟を戦争でなくしているもんで、男だったらこんな狭いところにいなんで、おまえたちみたいなバカばっかりは満州にでもどこにでも行けと・・・。

２．満蒙開拓青少年義勇軍の虚実

　池田町から 15 才で満州に行った仲間は 5 人。それが昭和 13 年の 4 月、茨城県にある満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所に行った。そこでの訓練は 3 ヶ月で、そこに行ったのは 15 才から 20 才くらいの少年だけだった。
　弟も学校を卒業してから満州に渡ったわけでね。そんときも親父から私に手紙が来て「お前も行ったところだから弟も行かす」と言ってね。私が行って実際に経験していたもんで「満州はオレ一人でいい」と言ったけれど、来てしまった。
　そのときの宣伝では向こうへ行って広いところを耕して地所をくれるとか何とか言ったので、それを信じ込んでいったわけですよ。親も私も。
　実際に言ってみたところが、銃は渡されるがクワ 1 つカマ 1 つ呉れない。向こうに渡ってからは 3 年間訓練所に入るんだが・・・これは満州に何カ所もある・・・300 人が 1 個中隊になっていた。
　じゃ実際３年間何をやっていたかといったら、結局軍隊代わりに満州の国境地帯に配属されて、ほとんど警備せ。明けても暮れても。
　訓練所があった場所は、奉天から北に上がって嫩江（のんこう）という県があるんだがね、そこに３ヶ月。そのあとノモンハン事件のあった近くの大和（やまと）訓練所で３年いた。
　その３年というものは、草一本刈るじゃなし、イモ一本作るじゃなし、銃一丁の警備せ。訓練らしい訓練も受けなんで。私たちの中隊は長野県、滋賀県、岩手県の混成中隊だった。
　みんな若い人っきりでしょう、３年間やることないもんで、毎日魚釣りに行ったりね、夜は警備には出るんですがね。そのうち仲間の派閥ができて、年とった者が下の者を使うとかがあって、だんだん訓練所内でもめ事が起こって、てんやわんやの無政府状態。

中隊長とか農事指導員とかという幹部もいたんだが、全然手がつけられなくなった。そんときは私も「しまった」と思ったですよ。
そういう年代だったもんで、年取った方から兵隊検査で軍隊に切り替わっていく者がでてきて、はじめ 300 人だったものが、順に兵隊にとられていった。
昭和 14 年にノモンハン事件というのが起こる。その事件の起きた一番最前線に私たちの大和の訓練所があっただいね（＝ありました)。そのときの状況は全くみじめなもんで、一方的にソ連軍に圧倒されて、ほとんど戦わずして敗退した。一番えらい目にあったのは正規の軍隊でない私たちで、逃げ場もない。一番記憶に残っているのは、こっちでは銃一丁しか持ってないし、日本の軍隊は来てくれないし、沼の中で首まで浸かって二日三晩というもの隠れてしゃがんでいた、そんな状況だった。7 月だったからまだよかった。
夜寝ているところを襲われて中隊から二人ばかり犠牲者がでた。でも行軍の手間賃だと思ったのか全員を襲うということはなかった。

３．義勇軍開拓団

3 年そこで訓練を終了して、今度は「義勇軍開拓団」としてノモンハンからずっと南へ下がって、チチハルにいく途中の白城市というところがあるだいね。そこの近くのソロンという部落に移ったんだがね。
そこへ行ったら 6 部落に別れて入植という形を取っただが。そこで集落毎にコーリャン作ったりアワ作ったりしたんだが、開拓者というより、そこにいた住民を追っ払って土地を耕したってことですね。
関東軍が多少の交渉で安い金で買い取ったことはあったろうが、その辺の内容は、こっちはわからないが、住民を追い出したことには変わりがない。
そこでコーリャン作ったりアワ作ったりだけでは足りないということで、牛とか羊とか豚とかニワトリとかの家畜（の飼育）が主体になった。馬も飼ったりして、そういう形でようやくいくらか百姓らしい百姓になって共同生活ができた。
開拓団の近くに日本軍の飛行場があった。早く言えば、そこへ食糧補給みたいな形でね、タマゴとか牛乳とか豚肉とかが飛行場でもほしかったから、そういう取引は飛行場とやったわけですがね。
それらしい計画を立ててやっていけるようになったんだが、問題は近くに満州人の集落があったこと。

日本人は地域住民に対して虫けら扱いしたことが多かったが、私で言えば自画自賛みたいになるけれど、私は部落長をずっとやらされていたこともあって、地域住民の立場も考えて見た場合に、この地域の人たちには少なくとも平等に扱うということでやってきた。いざこざのないように共同で生きていこうとやったもんで、村からの対応もあまり悪くはなかったと思うんだが。

中山隆之さん（92 才）

青少年義勇軍とは結局少年兵を使った国境警備だったことがわかります。この制度の当初は、義勇軍の募集は市町村役場が行うとされ、後に学校の教師を通して募集するようになったと「移民たちの『満州』」（二松啓紀著　平凡社新書）には書かれていましたが、長野では当初から学校が深く関わっていたこともわかります。

次回は、敗戦の色濃くなる情勢の中で満州でどのような生活をし、敗戦の後祖国にどのように帰ろうとしたのか、そのあたりの体験を聞くことにします。

8 月 31 日

今日は先日紹介した中山隆之さんへのインタビューの第 2 回です。今回は中山さんが義勇軍開拓団として白城市郊外で生活した時期から、敗戦を迎え、着の身着のままで奉天まで引き上げ、その後奉天にソ連軍が進駐してくるまでの避難民生活について聞きます。

満蒙開拓民としての生活と敗戦から帰国まで　（第 2 回）

４．白城市での比較的平穏な生活

白城市では、当時多少の手当があっただいね。ほんとの煙草銭。部落長をしていたのはそこへ移ってから終戦までだった。

6 部落に別れていたので部落によっては違いましたが・・・私のところでは一緒に住むからには、まして人の土地を耕すわけだから仲良くやっていかなければと思ってやっていた。（満州人の）貧しい人たちが「働かせてくれ」と頼みに来たりすれば手伝ってもらっていくらか賃

金を渡したり、そんな関係だもんで近くの集落とはうまくいっていたんです。
　関東軍の飛行場は近くにあったが、駐屯地はなかった。ただ、こんなことを言っていいのかどうかわかならないが、脱走兵が私たちのところへかくまってくれと、そんなこともあったですね。私たちとすれば、公にすることもできないし、かくまうこともできない。元へ戻るか、戻らないんだったらソ連へいくしかないと言って、いくらかお金や食糧を渡して気をつけて行きなさいと・・そんなこともあったね。
　奥地の方の開拓団は匪賊の襲来とかあったようだが、私たちのことろは南のほうだったもんで、終戦近くまで割と平穏に生活ができたですね。

５．敗戦と引き上げ

　終戦の情報は 8 月 15 日の翌日くらいにはわかっただが、関東軍憲兵から「終戦になった」という通知だけはあったです。「直ちに引き上げるように」と書いてあった。どうやって引きあげるかという指示は何にもない。近くの飛行場からの連絡もありました。明日にもソ連軍がくるから待ったなしで引き上げろということで。
　満州人の集落の人はどっからその情報を得たかねえ、すぐそれを悟って、私の所にきて「どんなことがあっても私たちが守るで、しばらくここで様子を見れ、ここで私たちが何とか面倒見るから」と、すがってでも言ってくれただいね。だけどとてもじゃないが、女・子どももいたからそうはいかない。
　年寄りや子どももいたから、夜、1 キロ位先の駅まで自分たちの馬車でちょっとした手荷物を持って、着の身着のままでそのままんま貨物列車に飛び乗った。とにかく安全な南へ下がろうということで。
　そこからが問題で、私たちばかりではなくて、全満州からそうやって開拓団、居留民団が引き上げるわけだから、無蓋車であろうが何でも乗れるものに我先に飛び乗らざるをえない。だからどこの駅に行ってもそういう人たちで満杯。力のあるものがわれ先に乗り込むから乗れない人もいっぱい。
　そんな中で、一番はっきり言いたいだけんどもね、そういう南に下がる列車の脇を軍用列車というのが通るだいね。貨物列車は駅でいつ出るか分からないが、それを待たせておいて軍用列車が通っていく（駅では一旦止まる）。

乗っているのは全部兵隊さん。それに何とか年寄り・子どもを乗せたいと思って、そう言ったら衛兵が昇降口に銃剣を持って（突き付けて）寄せ付けないんですよ。「これは我々軍隊の列車だから、お前たちは乗せられない」という。だから真っ先に引き上げるのは軍隊せ。私たちは銃は持っているが開拓民。軍用列車に乗っているのは関東軍。

奉天に着くまでに幾日くらいかかったか‥3 日くらいかかったかな。やっぱ食うや食わずで・・・あるところで、列車が止まって見ると、そこに関東軍も停車していて、こんなバケツでご飯を運んでいるのが見えるだ。こっちは腹減るし、他の居留民もみんな腹を空かせている

軍隊だけが白い飯（まんま）を食べているで、こっちはどうしても食べたい。何とかしてバケツ一杯だけでも欲しいじゃないかい。オレは食わなんでも子どもや年寄りは食べさせてやりたいし。

宵闇で薄暗いもんで、私が着ているものは義勇軍だから軍隊と同じもんだったで、列のなかに紛れ込んでね。盛る方の兵隊は釜からこうやって盛るのにいそがしいもんで、顔なんかいちいち見てねえしね。そんでも命がけだよ、何とかひとバケツ持ってきて、みんなで頬張って食べた覚えがある。

話したいことは、そのときの関東軍なんて全く統制がとれずバラバラせ。

途中はそんな状況だったが、奉天についてからね、あとから来る列車で避難民が着いたのを見かけたが、どのくらいまでそれが続いたかはわからない。

奉天についてから避難民が列車から降りてくるじゃないですか。若い母さんたちは子どもを連れたりおんぶしたりしているが、見たり聞いたりしても、おんぶしている子どもで生きている子どもは一人もいなんだ。生きている子は一人も見かけたことがない。みんな無蓋車で・・・無蓋車以外乗れなかった・・・おなかがすいたりして・・・。

それでも親にとっちゃ捨てるわけにはいかない。いずれ奉天まで来てからは捨てたがね。

６．奉天での避難民生活

奉天についてから、私は満鉄関係で鉄道警備が主体だったから、駅に満鉄の官舎があって、住むところだけは力任せに入れてもらうことができた。20 名ばかりのグループだったから何とか空いているところに入れてもらった。あとの人は学校とか映画館とかそういうところに

入った。
　弟や私の知っている人が誰か避難所に帰ってきてるじゃないかと思って、毎日私は探しに行っただいね。ただ、はっきりいえることは、一晩経つと明くる朝、馬車に死人が何十人と出ただ。食べるものはなし病気がはやってね、それを埋葬できるわけがないから川へ持って行ってみんな流して・・・それがどれくらい続いたか・・そういう状況だったですね。目も当てられなかった。
　奉天では中国の人は割合反抗しなんだね。ただ私たち日本人は金を持ったり食べ物を持ったりしている者もいたから、毎日毎夜暴動が起きたことがあった。というのは、そこに住んでいる中国人も食糧を断たれて飢餓寸前で暮らしていたから、日本人のところにいけばモノがあるということで、日本人の住んでいるところへ群れをなして押し寄せてきた。私らは官舎の 2 階にいて、棒を持って押し寄せてくるから、私たちは戦えないし、昼に庭の石から棍棒からみんな拾い上げて、階段を上ってくるのを石や棒で防ぐという、全く笑い話みたいなことをやっていた。暴動はだれも指揮をしているわけではないから、こんどは向こうの方へワーッと行っちまうだいね。そんなことが半月ほど続いたかなあ。
　関東軍は奉天に相当いたが、日本人をかばうとかは全くなかった。関東軍自身がバラバラでみんな自分の身の安全を考えて軍隊の用はぜんぜんなさなかっただね。あんときもう少し統制がとれて、ソ連の兵隊が入ってくるまで中継ぎできたらと思ったが・・・そんな気配は全くなかった。反対に迷惑をかけていた。

７．ソ連軍の進駐

　そのうち、ソ連の兵士が進駐して奉天を占領するようになったがね、治安の維持には真っ先にあたってくれて、暴動をなくしたりしてくれたね。日本の憲兵隊にあたるゲーペルがソ連の兵隊の中でも権威を持っていてね、このゲーペルが治安にあたってくれて日本人中国人を問わず平穏にいくようにしてくれたね。
　ソ連軍は統制はとれていて、ゲーペルがずっとまわっていたが、その隙間を見てね、ソ連の兵隊がちょいちょい私たちのところに隠れて自動小銃を持って来ただいね。何の目的で来たかというと、誰も彼も「これこれ」「これこれ」（手首の腕時計を指す）という。腕時計が欲しいんだね。日本人はほとんどみんな腕時計をもっていたから。それ

を渡すと喜んで帰って行くだいね。
　そういう状況だもんで、何とか食っていかなければならないということで、持っているものを少しずつ別のモノに変えたりして「がらくた市」というのをやったりしていた。そのがらくたの中に扇風機が売りに出てただいね。ソ連の兵隊がその扇風機というのを知らないんだね。クルクルと回っていて涼しい。そのうち一人の兵隊がソーッと扇風機の中に指を入れて「ブルブル」とやった。そしたら驚いて自動小銃でもって扇風機を撃ってバラバラにしてしまった。そういっちゃ悪いがその程度だったいね。
　そのときのウワサとして、当時の関東軍の司令官で長野県出身の山田乙三という大将がいただいね。直接目にしたわけじゃないが、逃げて歩いて最終的にソ連につかまっただが、捕まったときには5、6人の兵隊に檜の風呂桶を運ばせて山の中を逃げていたという。日本軍司令官の大将がですよ。もっぱらのうわさだったね。
　ソ連が来たのは11月の終わり頃だったかね、当時はもう一日も早く帰りたいじゃないですかね、少しでも南に下がって早く帰れるじゃかないかということで、意を決して朝鮮との境まで下がっることになった。

　想像を絶する苦労もあったろうし、死の淵を彷徨うこともあったろうと推測できます。
　関東軍が我先に居留民を尻目に南下していったことはさんざん指摘されてきたことですが、中山さんもその実態をはっきりと証言しています。
　ただ、奉天にソ連軍が進駐してきたあとのことについては、おそらくさぞ凄惨な状況になったのではないかとつい想像してしまうのですが、実際にはかなり統制がとれていたということがわかります。
　ネット上では、ソ連軍の通る至るところで婦女暴行、虐殺など非人間的な蛮行が横行したように描かれたものを見かけることがありますが、時期、地域の差が大きくあるようで、それぞれの地域で実際はどうであったのか詳しく証言を積み上げることが大事だと思わされます。
　無蓋車で着の身着のままで引き上げる過酷な逃避行の挙げ句、幼子は母の背で死に絶え、奉天にたどり着いても飢餓地獄の中で多数の人々が亡くなっていくすさまじさを、控えめな表現のなかからくみ取るべきではないでしょうか。
　次回は、朝鮮国境までの逃避行から中国共産党八路軍との遭遇までを聞きます。さらに数奇な運命が中山さんを翻弄します。ご期待ください。

2015 年 9 月 2 日

満蒙開拓青少年義勇軍として当時の満州に渡った中山さんが、敗戦を迎えて命からがら奉天までたどりつきます。生き延びるために苦心惨憺したあと、数ヶ月の後に意を決して帰国しようと朝鮮国境付近まで南下します。しかし、そこは中国共産党軍、いわゆる八路軍の支配下でした。

今回は入植地での若干のエピソードをはさんで、八路軍との遭遇からその後について聞くことにします。

八路軍との遭遇とその後（第 3 回）

８．義勇軍開拓団でのエピソード

こぼれ話をひとつすると、満州には狼がたくさんいてね、夜警に立っていていちばんこわいのは兵隊よりオオカミだったね。あるとき、自分が飼っていた馬一頭と羊 40 頭が、朝起きてみたら骨だらけ。一夜でぜんぶ襲われた。一晩で馬一頭だよ、羊 40 頭が包丁でスパッと切ったようにやられていてね。

これは何とか退治しなけりゃと思って、オオカミの住んでいるところはどこだと中国の部落の人に聞いたがね。そしたら部落の人は、「中山さん、わるいけど、ここのオオカミには手を出してくれるな。頼むからそういうことは止めてくれ」と、こういうわけせ。

何しろその部落の人が言うには、オオカミというのは 60 キロの重さのものを持って 8 尺の土塀を跳び越えるというくらい凶暴だって言う。凶暴だけんども利口で、仲間を殺されたりしたら必ず仕返しに来て、豚やニワトリを食べちまう。で、共存でいくしかない、と近くの人がそう言うだいね。

９．八路軍との遭遇

統制のとれないところだったらどうだったか知らないが、奉天みたいな大きな都市になるとソ連軍の憲兵隊もいたりしてね（秩序はある程度保たれていた）。ただ、お酒が好きでね、時計とかもそうだが、酒を飲ませたりしていたね。

奉天を出たのは 10 月末くらいだったか、早く南に下がりたいというのと、冬になると食べるものがなくなるからということだったね。

北朝鮮の境までね、列車で何とか下ることができてね、そこですぐ

船に乗れるわけにはいかないから、一旦降りたんだがね。（現在の）北朝鮮との境から引き揚げ船があるとウワサで聞いたもんで行っただいね。
　今度は食べたり寝たり起きたりする場所がなけりゃということで・・・。私たち男だけなら何とでもなるけんども、女・子どもや同じ長野県の迷っている年寄りもいてそんな人たの面倒も見たりして、合わせると 30 人ばかしの食べるものや寝る場所を探すのが大変だったですがね。

　ちょうどそこの地域の管轄がたまたま八路軍の統治地区だっただいね。そこの病院でお世話になることになった。
　病院というのは、もとを正せば私が逃げるときにリュックサックの他にカバンを 1 つ持ってたが、そのカバンの中に注射器から聴診器なんかが入っていたわけせ。何故それを持っていたかというと、開拓団のときにそこにいた医者の当番をしていたんだが、終戦の時にはその先生は具合が悪くて先に日本に帰ったもんで、一時私がそこの留守番みたいにしていたから、逃げるときに万一病気にでもなったときにと思って、私が分かる範囲の薬やら注射器やら聴診器まで入れて、持ってきていた。
　八路軍の調査のときにカバンの中を見て、「こういうものを持っているのは医者に違いない」ってわけだ。それがもとで、近くの野戦病院へ八路軍の憲兵が「こういう者を捕まえた」というわけで連れていかれた。当時、八路軍は医者や看護師がのどから手が出るほど欲しかったもんで、いや私はこういうもんだと説明しても、こんなカバンを持っているのは医者だろうと言う。そんなことが縁で病院の手伝いをすることになった。
　「お前さんがそう言うならそれでいいが、それにしてもそれだけの人員を抱えて何とか生き延びなければならないだろうし、そろって国へ帰るまで何とかしなければならないだろう。我々が統治している地域であんたたちを見捨てる訳にはいかない。そうかといってただ遊ばせているわけにもいかない。病院の近くに空き家があるから、とにかくそこに住め」と。手の空いた者は野戦病院で掃除したり患者を運んだりしろと言ってくれただいね。
　八路軍の接する態度がね、非常によかったもんでね，安心して任せてとりあえず帰るまで病院にくっついていようということになっただ。そこでは日本軍の医者とか日赤の看護婦とかが沢山抑留されていて、

非常に頼りにされていた。八路軍との関係はそれが始まりせ。

１０．巻き込まれた中国内戦

　それから少しずつ引き上げが始まった。
　誰だって 1 日も早く帰りたいがね。そうはいっても一回の船で帰られる人数は決まっているもんでね、順番待ちとはいっても我先にとなるから非常な混乱が起きた。こんなことじゃいけない、何とか統制のとれた引き上げをしなけりゃいけない。それには何とか日本人の組織を作って、順番に女・子どもから病人を先に帰られるようにしようとしたがね。日本人の「居留民会」を立ち上げることになった。それで、女子どもや年寄りは順番に帰すことができた。

　人の運命というのは分からないもので、私の運命もそこが 1 つの転換点だった。
　一冬そこで過ごして、明くる年のたぶん夏頃だったか、最後の引き揚げ船が来ると八路軍の病院から連絡があって、最後の引き揚げ船だからお前たちそれで明日帰れと。当時残っていたのは若い仲間 7 人だった。
　今までいろんなことがあって十分なこともできなんだが、体に気をつけてといって酒一升くれ、「今夜これを飲んで明日帰りなさい」と言ってくれた。さあ、私らは喜んじまってね、これでやっと帰れる、飲もうじゃないかというので、飲んでご機嫌で寝たわ。

　明くる日、帰り支度していると、バンバンバンバンと銃声の音がしたわね。病院から連絡があって、「いま国民党軍が戦闘を仕掛けてきて、これから戦闘状態に陥るから帰国しようとしてもできる状態ではない、あんたたちはどうする」っていうわけだ。
　帰れると思ったところに、藪から棒に戦争が始まった。そのとき八路軍の言い分は、「病院は安全地帯に下がるからあんたたちは一応私たちと一緒に下がるか、それともここにいて国民党軍の方に行きたいと言えばそちらへ行くのを止めはしない、それはあんたたち自身が決めろ」。
　さあ、弱っちまった。これは。どっちがいいかわからんだもんね。
　何しろ八路軍とつきあった関係上、ここにいれば身の安全だけは確かだ、しかも後方に下がると言ってるで、それじゃこのまま八路軍に

お世話になろうじゃないかということになった。それから内戦がはじまっちまっただいね。
　ソ連との国境の山の麓まで明けても暮れても後退後退でね。蒋介石軍はどんどん攻めてくるで、まして病院だから逃げるのに忙しくて最後にもうこれ以上下がれないというところまで来たら、それから一転攻勢に出ただいね。
　今度は追っていくのが忙しい。どこにそんな力があったかっただか、やっぱり軍の指導の関係で最終的に国民の支持だね。八路軍というのは非常に質素でみすぼらしい軍隊だったが、精神的な道徳的な面は非常に立派だったでね、各集落で野営すると、明くる日になりゃ人員がだんだんだんだん増えてくる。若い人が我も我もと志願して、戦うたんびにみるみる軍隊が増えていったでね。
　そうやって集まった田舎の兵隊さんたちだもんで、笑い話だが、奥地で育って平野部で走る汽車を知らないわけですよ。見たことがない。でかいものが「ゴッゴッゴッ」とくると目を丸くして怖がって、こんなのは中山が詳しいといって、列車が通るたんびに私の回りに寄ってくる。それくらい根は純粋でね。だから、日本人だからといってそこにいて肩身の狭い思いはしなんだね。

１１．忘れられない中国人老婆の一言

　中国人の日本人に対する態度は、いろんな見方があるだろうけれど、どうしてもみんなに伝えたいと思うことが１つあるだいね。
　日本に帰ればおそらく満州に戻るようなことはないだろう。少なくとも今まで日本軍がやったこと、ノモンハン事件の拠点、日露戦争の南京、自分の目で確かめて、実際にどういう状況だったのか一遍見たいと思って旅行したことがある。
　ある部落へ私が行ったとき、喉が渇いたもんで、水を飲ませてくれと田舎の一軒家に行ったら、そこのおばさんが快く接してくれて、お茶を出してくれた。帰りがけにそのおばあさん、何と言ったと思う。
　「あんたこれから日本に帰るというだが、私のお願いが １ つある。日本に帰ったら私の気持ちを是非伝えてもらいたい。
実は私は日本の兵隊に自分の夫と子どもを殺された。私一人が取り残された。しかし、今のあんたに向かって私はそれをどうこういうわけじゃない。
　日本の軍によって私の家族は全滅したけれど、あんたの皮膚も私の

皮膚も目の色も髪の毛も、コトバは違っても何も変わらない。なぜいがみ合わなければならない。なぜ殺し合わなければいけないか。仲良くできないものか。なぜケンカしなければならないのか。
　私は過去のことについてはこれ以上言わないが、これからお願いしたいのは、平和であって戦争しちゃいけないということだけ。
　日本に帰ったらこのババのいったことを伝えてもらって、日本も中国も世界の人も仲良くしなければいけないよ」
腹の中はどんなだったか、夫も子どもも亡くした 70 才くらいのばあちゃんがオレにそう言うだよ。これだけは忘れることができない。

　ここまで読んで頂いていかがでしょうか。多少の編集はありますが、ほとんど中山さんが話してくれた通りです。
　引き揚げ者から、中国八路軍の規律の正しさ、捕虜への人間的な対応については「ウワサ」として語られてはいましたが、その一方、八路軍の「洗脳教育」について誇大に喧伝する言説がネット上であふれています。
　これも地域や時期によって異なっていただろうとは思いますが、中山さんの体験はひとつの重要な証言になり得ると思われます。
　あるお年寄りが語りかけたというエピソードは、私が「中国人にひどいことをした日本人に、なぜ八路軍はこれほど人道的に対応できたのか」という問いかけに直接は答えずに、紹介してくれたものです。そうできたのは中国人の「国民性」かなあとも。中山さんがずっと忘れず大事にしているシーンなのではないかと思われました。
　次回は最終回。引き上げから日本での生活までを聞きます。

2015 年 9 月 8 日

　今日は、先日来紹介している中山さんの戦争体験最終回です。
　ご高齢にもかかわらず長時間のインタビューに答えて頂いて、１時間半を過ぎたあたりからちょっと疲れが見え始め、話が飛んだりよく聞き取れなくなる場面がしばしば現れてしまいました。一生懸命に話してくださるのでつい甘えてしまいました。反省しています。
　従って、最終回はかなりおおまかな話になることをご了解ください。十分お話を聞くことができなかった上海での生活と帰国に至る状況、帰国後の日本社会の様子などは、あらためてお聞きすることになっています。

上海での生活と帰国（第４回）

１２．上海での生活

（八路軍について中国を南下して）最終的に上海まで行ったね。帰るまで上海にいましたから。

中華人民共和国となって、国際法上他国の兵役に就くことができないようになったので、それまでいた八路軍から卒業ということになった。そのかわり職も何も世話してくれて困らないようにしてくれた。

一番初めは病院の雑役から始まって、そこには日本人の医者や看護婦さんがいたもんで中国人との対話、患者との対話・・・病院では、いろんな問題がおきるじゃないですか。朝から晩までそんな専門的に仲介役に立って、指導員という形で患者と話したり従業員と話したり、明け暮れ本当に忙しかったね。自分の神経すり減らすほど、夜苦痛で吐いたまま寝たようなこともあったけれど。

そんな中で、人民解放軍の規定によって、一兵卒から最後には尉官級までになったいね。これは中国人も日本人も隔てなく、その人の状況に応じてみてくれたがね。尉官になったときには当番兵もついて、一部屋もらってね。そこまでいったが大変な仕事だったですよ。それでもその功労があったもんでね、その後政府の国家公務員でもって上海で勤めたときも、それなりに全部加算してもらって上海の一等地の所に住まわしてもらった。もちろん住まいから家賃までタダだった。

上海では中国人と隔てなく同等にみてもらったってことだいね。とくに日本人で長い間八路軍に貢献してくれたってことで国からは「小報」（注：この語句は怪しい）といってね、金紫勲章じゃないが、一生涯の生活保障で、給料の他に住まいから部屋代までみてくれた。

上海にいたのは 3 年ばかし。上海に来て八路軍から卒業してからはすぐに公務員にしてくれて、企業に勤めさせてもらったってことだね。

１３．中国での「学習」

中華人民共和国になった当時は日本共産党と友好的な状況で徳田さんも野坂さんも中国へ来たりね。はじめ私は共産党のキの字も知らなんだが、特別な計らいでわざわざ日本人だけのための日本人学校、学習院を共産党でつくってくれてその学校に上海にいた 3 年ばかり行っていた。

帰国してからもそういうことが少しばかり（職探しなどに）影響しましたね。私は弟がいたから家を継ぐつもりはなくて、帰ってきた当時あれこれ仕事を探しても、なんだかんだといって断られる。親父も弟も「兄貴、これはおかしい」と言って、あれこれ聞いてみたら国から横やりが入って、中国帰り、とくに最後に帰ってきた連中は徹底して学習させられているからといって、各企業でも気をつけた方がいいということだったらしい。

それがわかって、あわくってもしかたがないんで、「今に見てろ」って思った。親も、「子どもふたりも連れているし兄貴が死んだでお前があとを継いでおれら年寄りの面倒をみてくれや」ということになった。それで、弟は別居させて、それで百姓やるようになった。

そんなことは人には話していないがね、事実はあっただいね。

１４．人間の共同の大切さ

（当時をふりかえって、今日の若い人たちに伝えたいことは何ですか、との問いに）

私自身としては、いま年寄りばっか増えて、若い人は個人個人引っ込んでしまっていている。

私の若い頃、集団減反政策が始まって、それから農業委員やったり民生委員やったり、いろいろやってきましたが、そういう人がいまは年寄りになってしまった。ところが今の若い人は、そういったことに我関せずみたいになっている、昔はみんなで共同で助け合っていた。年寄りの面倒も見ていかなければいけない。（こうしたことは）3 人でも 4 人でも始めりゃできると思うんですよ。

私や M さんやそういう年代の人が 4, 5 人で、減反が始まった当時から、これは個々でやっていたんじゃ決してうまくいかないというんで、音頭をとって集団減反という形で組合を立ち上げてね、それが町中に広がった。全国的にもそれが評判になってよその知事もわざわざ来てくれて「頑張ってくれ」といってくれたね。経験を講演してくれという依頼もきた。それでも家まで送り迎えしてくれるところもあって県内からはじまってそうとうあちこち行って、そのつまらねえ話をさせてもらったが。

個々の問題ではそれぞれ頑張ってもらわなければならないが、地域社会をどうしていくかもっと力を合わせなければいけない。あまりに個々になりすぎているように思える。場合によっちゃ半月もとなりど

うしで顔もみない。こういう世の中になればなるほど、もっと人のつながりを大事にして、ともに助け合っていかなければいかんがね。

お読みになっていかがでしたでしょうか。聞き足りないことはいろいろありましたが、ここまでまとまってお話していただけたことは大変な収穫でした。70 年経っても記憶が鮮明であったのは、それだけ身体に刻みつけられた体験をなさったからでしょう。

感心するのは、よくここまでまとまったお話を長時間してくださったということです。90 才を過ぎても頭の切れは全く衰えていませんものね。

紹介が遅れてしまいましたが、中山さんは長い中国での生活で流暢とは言えないまでも日常会話程度の中国語はできたとお話でした。したがって、前回の中国での老婦人の話なども、身にしみて聞かれたのではないでしょうか。

当時の学校教師が満蒙開拓の糸を引いたこと、開拓とは縁もゆかりもない国境警備の少年兵として満州に送り出されたこと、終戦を迎え、我先に逃げていく関東軍に取り残され生死を彷徨って逃げのびた体験、いずれも他の人からは生の声としてはほとんど聞くことのできない貴重なものです。

さらに、八路軍との出会いから上海に至る過程で、中山さんが出会った共産党軍（八路軍）の人道的な振る舞いには驚かされます。

もちろん、中国共産党の思想については当時からかなり教条的な部分もありましたから、中国の富農や日本軍の将校などについては処刑したり拷問したりした事実も知られています。とはいえ、中山さんが見聞きした事実は特筆すべきものでしょう。

今日、覇権的・大国的な対外政策をとり、馬鹿げた時代錯誤的軍事パレードなどで自国の軍備を誇示する態度と、初期の毛沢東指導下の中国共産党の姿勢とは雲泥の差があると私には思われます。

高齢で耳が不自由な中山さんですが、私の質問にも丁寧に答えていただき、さらに次回のインタビューを快諾していただいたことに心から感謝いたします。

追記　2019年8月18日

尊敬する大先輩である中山隆之さんの訃報に接し　突然のことで驚くとともに、もうお姿が見られないかと思うと残念でなりません。

バラ園の造園については快く土地を提供して下さり、農業についても親切にご指導いただきました。感謝してもしすぎることはありません。

満蒙開拓のことやその後のことについて、お話をお聞きする予定でしたが結局果たせないままになったことが心残りです。しかし、ここに記録したことがらは、中山さんの少年、青年時代を知るだけではなく、当時のこの国の姿を知る意味でも貴重な証言になっていることは間違いありません。ぜひ、多くの皆さまにお読み頂きたいと思います。

中山さん、どうぞ安らかにお眠りください。ご冥福を心からお祈りいたします。

村端　浩